

河口湖コミュニティに関するノート

庄 司 俊 之

Essay on the Kawaguchiko Community

Toshiyuki Shoji

Abstract

This essay is on Mt. Fuji and Lake Kawaguchi which are natural resources of the Kawaguchiko community. Although this essay will not focus on such sceneries, it describes the human ties among the community. Such ties are believed to be a product of human communication of locals (and outsiders) who live close to nature.

In this essay the following points are examined. First, expressions of famous authors who wrote about Mt. Fuji or Lake Kawaguchi will be reviewed. Second, by focusing on picture postcards, the gradual transition throughout the time period will be explained. Third, a folk tale, Kachikachiyama, will be used for describing the characteristics of social contexts in the specific time period. Finally, the historical event, the construction project of Arakura Horinuki, a water tunnel between Kawaguchiko area and Fujiyoshida area, will be focused. I will try to explain why people (not only locals but also outsiders) admire this construction project.

By mentioning importance of human factors which contribute as essential conditions for today's sightseeing policy (business), I will conclude my essay.

Key Words: Kawaguchiko community, history, human ties, natural resources

はじめに

平成の大合併によって富士河口湖町が誕生した。その名称には文字どおり、富士と河口湖という2つの名が刻まれている。これこそ河口湖エリアの主要な観光資源である。町の豊かさを測る尺度は色々あるけれども、観光資源という点で、このエリアがきわめて恵まれているのは言うまでもない。

ただ、ごく一般論でいえば、観光資源である自然の美と、観光都市の「コミュニティとしての美しさ」とは必ずしもイコールではない。また、美しい自然があってそこに人間が住んでいれば、ただちに観光都市ができあがるわけでもない。そうではなく、自然美に対して、人々の側にも自然美を愛でる様々な営みがあって、その営みの集積こそが、観光都市を成立させるだろう。

そこに住む人々の生活は、何らかのかたちで自然と結びついている。そして観光客は自然を見、それだけでなく、自然とともにある人々を——意図するしないにかかわらず——視野に収めて通り過ぎていく。行政や民間が観光化を推進するさい、そこに美しい自然があるだけでは十分でなく、それに加えて人為的に美を演出する営みが必要とされ、それこそが中心的な課題となったりするのは、まさに人々の営みの重要性を物語っている。

以下の小論は、観光都市のための提言を行なうものではない。まして、冒頭で触れた「コミュニティとしての美しさ」について、自分の美学を語ろうとするものでもない。ただ、富士山と河口湖をめぐって、どのような人々の営みが存在してきたか。そうした現在が拠って立つ前提条件、もしくは「地層」にあたる部分について、わずかに勉強したことをノートに記そうとしている。

第1節では文人たちについて、第2節ではハガキや写真について触れたい。ここで注目するのは個人的な趣味趣向の問題ではなく、自然に対峙するその仕方についてである。3節では民話に触れつつ、その背後にある社会空間の特性を考えてみる。そして4節では、新倉掘抜事業という河口湖エリアの人々の誇るべき歴史的営みの、何がまさに誇るべき点なのかについて述べようと思う。最後に観光事業について、若干のことを言い添えたい。

1. 文人たち

風光明媚な河口湖は文人たちに愛された。彼らはこの地域について様々な表現を与えたが、そのなかで最も有名な1人が太宰治だろう。太宰は、河口湖と富士山を望む天下茶屋に滞在して「富嶽百景」という作品を書いた。いまでも残る天下茶屋の近くには記念碑がたち、有名な一節「富士には月見草がよく似合ふ」が刻まれている。

だが、多くの人々は、富士山と月見草という絶妙な取り合わせを太宰が愛でた、というふうには誤解しているのではなかろうか？ というのも、その一節の数頁前にはこう書かれているのである。「ここから見た富士は、むかしから富士三景の一つにかぞえられているのだそうであるが、私は、あまり好かなかった。好かないばかりか、軽蔑さえした。あまりに、おあつらえむきの富士である。まんなかに富士があって、その下に河口湖が白く寒々

とひろがり、近景の山々がその両袖にひっそり蹲って湖を抱きかかえるようにしている。私は、ひとめ見て、狼狽し、顔を赤らめた。これは、まるで、風呂屋のペンキ画だ」（太宰、1939）と。

ここには太宰特有の、屈折した羞恥心がある。太宰は富士を「軽蔑する」と言っているけれども、むしろ、額面どおりには受け取れない。本当は作品の随所で、太宰は富士の美に圧倒され、むしろ、その美を尋常ならざる高さで評価してさえいる。しかし、太宰は、美しさが何の躊躇もなく露呈することを恥ずかしく思い、また、それを恥ずかしげもなく受け取る人々の態度に恥ずかしさを覚えている。そもそも月見草とは、バス中で、富士を一瞥もせずに反対方向を向いていた老婆が、降車後ふと路傍に目を向けたときに咲いていた花だった。太宰は、月見草という「草花」が富士に似合うと言っているのではない。富士のような存在に微動すらせず、むしろ路傍の花にふと気づいてやれる心栄えこそが、富士には相応しいと言っているのである。作品末尾では、主人公は観光客にシャッターを押すのを頼まれ、彼はわざと人物を入れずにシャッターを切る。それはあたかも「あなたは景色の気高さに見合っているか？」とからかうかのようである。

このような太宰の富士へのこだわりは、ほぼ間違いなく、富士が戦前の天皇に重ねられているからだろう。同じ富士河口湖町に由来のある「御伽草子」でも、太宰は桃太郎の執筆を予定し、結局は断念するのだが、ここでも太宰は、戦前日本のシンボルについて何かを語ろうとしていたのだった。この点は話がそれるので立ち入らない。ただ、この文人がみた富士山が「むきだしの自然」ではなかったことに注目しておこう。富士は桃太郎同様、日本社会や道徳の象徴だったのであり、そしてまた、太宰は象徴としての富士を愛するものの、その愛は決して無防備なものであってはならず、月見草という言葉でしか表現できないような、ある心的態度を要するものだと語られている。つまり「富嶽百景」という作品は終始、人間の営みに焦点をあて主題化していたのだった。

もう1人、河口湖畔に碑が立てられた文人に谷崎潤一郎がいる。谷崎は、夫人とともに勝山に逗留して、ここで代表作「細雪」を書いている。作中でも河口湖の情景が描写されており、碑に刻まれた文字はそこから採られたものである。

「細雪」という4人姉妹の物語の詳細に、ここで触れる必要はないだろう。注目したいのは作品ではなく、谷崎という作家のほうだ。谷崎は、しばしば耽美主義と呼ばれるように、美的なものに固執した。しかも、谷崎が好んだ美は、趣味のよい調度品や細部まで配慮の行き届いた建築などからなる物質的世界のうえで、人々が交わす儀礼やその侵犯から織り成されるものである。それは、きわめて人工的な美であった⁽¹⁾。そうすると、富士や河口湖といった自然美は、むしろ谷崎の美意識の対極に位置すると言うべきではないかと思われてくる。谷崎と河口湖という組み合わせは、一見すると、かなり不釣合に見えるのだ。そもそも「細雪」の主要な舞台は河口湖ではない。

しかし、ここで、まえにみた太宰治の語り方を横へ置いてみると、腑に落ちることがある。つまり——根拠こそ薄弱であるが——、谷崎もまた、自然美に圧倒されたかも知れず、いや、おそらく圧倒されたからこそ、その自然に拮抗するかたちで人間的な美を、渾身の

傑作「細雪」のなかに定着させることができたのだ、と。そう理解してみると「不釣合い」という印象は氷解するのではないか。また、その対置のやり方において、太宰は倫理的で谷崎は美的であるという決定的な違いがあるにせよ、人為を信じるのが作家であるということもできそうだ。

最後にもう1人、伊藤左千夫に触れておこう。伊藤には、文字どおり「河口湖」という小編がある。碑は立っていない。この作品は、宿とその近隣の描写から始まって、ふと出会った舟子の老翁から、河口湖をめぐる湖水の伝説を聞き、「おもしろい、おもしろい」と先をせかして物語を味わい尽くし、その晩はぐっすり眠りに落ちた、というだけの筋である。頁数も少なく、半分近くを老翁の語りが占めている（伊藤、1907）。

伊藤は明らかに、太宰や谷崎に比べて無邪気に河口湖を堪能している。だが、伊藤もまた、自然を描写するのではなくて、その自然のなかで人々が語り継いできた伝説を作者に語って聞かせる老翁を登場させ、それを描写することをつうじて、河口湖を堪能した経験を1つの作品に結晶化させている。筆者の印象によれば、谷崎は「細雪」の美的世界をみずからの手でつくりあげることで自然に拮抗しようとしたのだが、それに対して伊藤は、人々の語りの集積のなかに、自然美を人間的表現に変換する契機を見出しているかのようである。

以上、さしあたり3人をみただけでも、それぞれがそれぞれのやり方で、自然に対峙している姿が読み取ることができる。もちろん、住民や観光客は作家ではないのだから、同じようにする必要はないのだが、自然美が人々に受け取られるためには、作家的表現に相当する何らかの営みを必要とすることは、ここから引き出してもよいだろう。月見草をただのキャッチコピーのように利用するだけではもったいないとも思うのである。

2. 〈風景〉の歴史から失われたもの

文人というのは一部の特権的な人々だが、では、ごく一般的な人々は富士や河口湖をどのように眺めてきたのだろうか。幸い、富士山については参考になる論考がいくつかあるので、ここではそれを概観するところから始めてみよう。

竹谷鞆負「富士の精神史」では、富士を描いた絵画の歴史の変遷を追いかけている（竹谷、1998）。子どもが描く富士といえば頂上ギザギザに尖った三峰が定番だが、実際に山をみると必ずしも三峰にはみえない。他方、いくつかの富士山画をみると、ギザギザをもたない一峰で描かれており、どうしてそのような違いが出てくるのか、わからない。こうした素朴な疑問が出発点となって、富士山画のパターンの変化を考察したのがこの研究である。

かいつまんで紹介すると、古代、富士は崇敬はされても絶対的な存在とは見なされていなかった。だから、たとえば聖徳太子を引き立てる格好で、富士が画面の隅に小さく描かれ、それを飛び越える聖徳太子の偉大さが強調されるといった絵も存在しているという。ところが8世紀末のたび重なる噴火以降、富士への畏敬の念は高まり、画面上でも大きく描かれるようになっていく。このとき特徴的なのは、ほとんど縦型の長方形に近い急斜面の

富士が多く描かれたということだ。この時代、絵画に写実性は必要なく、モデルになったのは中国の道教、神仙思想の霊山であった。富士は、ここで絶対的な宗教的崇拜の対象としての地位を獲得するのである。しかし、竹谷の関心事である峰の形状についていえば、必ずしも統一性はなかったらしい。

それが鎌倉後期から江戸にかけての時期になると、なだらかな稜線の富士山絵が多く描かれるようになる。理由の1つは交通量の増大であり、急斜面の図像はあまりにも実物からかけ離れていると強く意識されるようになったのだろう。ここにはリアリズムが導入されたという側面があった。が、そのほかにも考慮すべき事柄がある。富士の祭神は、一時期かぐや姫だった時代もあるのだが、竹谷の推定によれば、江戸幕府による仏教や道教、神仙思想の排撃と、それにとまなう儒教、神道の称揚などが原因となって、祭神のバトンタッチという変化が起きている。これによって、富士山絵から道教的要素が払拭されるのだが、祭神の交代をきっかけにして、古代以来様々に描かれた富士の峰は「三峰」を定型とする方向で整序されていく。こうして、なだらかな稜線が象徴するリアリズムと三峰が象徴する宗教性の絶妙なバランスのもと、われわれにとってもっとも馴染み深い富士山絵が、この時期に多く描かれるようになるのである。

しかし、江戸も中期以降になると、一方ではリアリズムを突き詰めて、頂上を三峰に描かない台形に近い富士山絵が現れてくる。他方では、江戸八百八講といわれた富士山信仰の隆盛があって、講の紋章には三峰を基本とする様々なパターンの富士がデザインとして利用されるようになる。ようするにバラバラになり、じつに多様で個性的な富士が描かれることになったわけだが、ここで重要なのは、リアリズム一辺倒であれば写真のように台形に近い富士ばかりが描かれたはずだ、ということだ。そうはならず多様化していったのは、三峰という信仰に根ざした図像(=アイコン)を、裕福になった江戸市民たちが創造性をまじえて自由に描いたからに他ならない。竹谷によれば、今日でも子どもが富士を三峰で描いたりするのは、富士山信仰が衰えてなお、富士を三峰で描くアイコンの形式が、形式だけになっても生き残っているからだという。

竹谷は、明治以降の話にほとんど触れていない。そこでつぎに、富士吉田市歴史民俗博物館発行「絵葉書にみる富士登山」を参考にしてみたい。絵ハガキは郵便制度施行以降のものだから、この1世紀を振り返るのに適した材料である。また、きわめて大衆的に利用されたものでもあるから、より多くの人々にとっての富士を推し量るのに適した材料ともいえそうだ。

その巻末の解説で、奥脇和男はこう書いている。「絵葉書の変遷を概観すると、信仰を基盤とした富士登山が、次第に観光を目的とした富士登山へと移行していく変遷をそのまま活写したものであったことがわかる。伝統的な登山口では、旧来の信仰登山の伝統を基盤として以前から名の知られていた信仰地・拝所・旧跡が…最終的には信仰色を払拭し、富士の山容を中心とした絵葉書に収斂していくようすをうかがうことができる」(奥脇、1999)と。

詳しくは写真をみて実感してもらおうしかないのだが、近代に入って以降もなお、富士山

信仰に関わる事跡群⁽²⁾が一般市民の利用する絵ハガキの主要なモチーフになっていたことは、今日の眼でみて驚くべきことに違いない。しかし事実として、信仰登山の視点を踏襲したそれ、すなわち、山に分け入って歩いたときに会おう事跡群を中心にして眺められた富士のイメージこそが、明治以降しばらくのあいだ、人々にとっての富士の姿の1つだったのである。それがやがて、信仰という営みとは無縁な場所で、分け入ることなく遠く離れて眺める富士だけが、人々にとって唯一に近い富士のイメージになっていく。われわれがよく知る富士、駅前で買える絵ハガキの富士、そして太宰が「風呂屋のペンキ画」と呼んだそれとは、この最後に登場してきたものに他ならない。

富士が人々によってどう眺められてきたか、ここまでやや長めに概観してきた。富士はずっと、噴火によって形状が変化した以外、何も変わらずにそこにあった。しかし、絵画や絵ハガキは、自然のどこに注目するか、どこを切り取るか、またそれをどう表現するかという点で、〈風景〉に織り込まれた人々の営みを端的に明るみに出す。しかもそれは個人的なパースペクティブ以上のもの、個人の背後にある人々の集まり、コミュニティと自然との関係性をも明るみに出すだろう。そして今日の絵ハガキが「富士の山容を中心とした絵葉書に収斂していく」とすれば、それはどこか、人々の営みの厚みが減退しているともとれそうで——やや勇み足と承知でいえば——、ある種の貧しさを感じるのである。

なお、富士河口湖町立図書館所蔵のDVD「思い出の河口湖町」などをみると、この100年のうちに、日常的に使われたであろう、小型舟を含んだ湖畔の〈風景〉が、カラー時代になって消失しているのを見て取れる。これは、自動車の普及や大橋の建設によって、舟が実際に使われなくなったからだろうが、人間のいない湖の〈風景〉が比較的新しいことを示唆している。富士をめぐる風景画の歴史から失われたものが宗教性だとしたら、湖の風景写真から失われたのは人々の生活かも知れない。

3. 民話と交通空間

以上では、自然をどう見るか、どう見てきたかという問いを立てると、その問いが跳ね返り、人々の営みを明るみに出すということを示唆してきた。ではつぎに、視点をかえて、人々の営みそのものに目をむけてみよう。

ここで手がかりにするのは——やや奇妙な印象を受けるだろうが——民話・かちかち山である。この民話は河口湖東岸、天上山が舞台とされ、タヌキは河口湖で死んだという。

民話、民間伝承、口承文学は、長いあいだ文字を必要としない一般民衆、被支配層の娯楽であった。対する支配者層は、みずからの権力の正統性をいうために、文字によって正確に記録される神話を必要としたが、民衆の口承文学はそれと鋭い対照をなしている。また、文字が眼によって享受され固定的であったのに対して、口承は声によって伝達され、耳に届くや否や姿を消す、そうした流動性をもっていた。消極的ないみでは脆弱ともいえるが、積極的ないみでは聴衆の反応に応じて形を変え、変化をつうじて様々な地方へ伝播していくこともできた。そうした民話の1つが、かちかち山である。

柳田國男によれば、この物語は3つの部分に分割できるという（柳田、1935）。第1パー

トはタヌキが捕まるまで、第2パートがタヌキが老夫婦に逆襲するまで、第3パートがウサギによるタヌキへの復讐である。このように分割できるのは、この3つが相互に亀裂を孕んでいるからである。たとえば第1パートでのタヌキは、あるいみで勤勉な農夫である老爺にこらしめられる怠惰な存在にすぎないのに、しかし第2パートになると、いきなり悪のヒーローよろしく機知を駆使して窮地を脱する。にもかかわらず第3パートでは、ふたたびウサギに一方的にやられるだけの、むしろ愚か者に近くなる。タヌキのキャラクターに一貫性がないのである。とくに第2パートの残虐ぶりと第3パートのやられっぷりは、それぞれが独自の笑い話である。そして第3パートで活躍するウサギには、タヌキに過酷な罰を与えるだけの資格が説得力あるかたちで説明されておらず、唐突な印象がある。

こうした整合性のなさは、この物語がもともと断片的な挿話が集積されて成立したせいだと柳田はみる。それらの断片は、もともと他のエリアでつくられたのだ。柳田は、みずから収拾した挿話に逐一照らし合わせ、原型が他にあったことを例証してみせる。そして、それらが1つに総合された場所こそが河口湖であった。

日常生活が徐々に複雑なものになっていくと、より複雑な思考や複雑な趣向が現れてくる。それまで断片的な挿話で満足していたのがそれでは足りなくなり、より一層体系化された物語が聴衆によって求められるようになっていく。このときはじめて、かちかち山をはじめとする数々の民話が誕生する。かちかち山は、今日からみれば色々穴のあいた物語かも知れないが、それは当時としては、社会がより高度な段階に入ったことで要求されたものだったのだ。

それにしても、なぜそのような総合が河口湖で可能となったのだろうか？ その点について、柳田は何も語っていない。柳田の関心は総合の局面にはなかったからである。柳田は、人々が他の地域から隔絶された「閉じたムラ」に生きたのではなく、緩やかに相互交流する広いネットワークのもとで生きたと考えた。そうした人々の生きた世界をこそ、柳田は民俗学という学問の創始をつうじて再現しようと考えていたのである⁽³⁾。民話における断片の総合に関しては、口承文学の語り部の才能によるとのみ見なしていたようだ。

が、柳田に反対して考える必要はなく、柳田の線にそったままでも、河口湖エリアで断片の総合が可能だった理由を想像することはできる。というのも、河口湖エリアこそ、古代より交通の要衝であり、だからこその他のエリアの断片的挿話が集まりやすかったと考えられるからだ。律令時代、甲斐国に3つある駅の1つが、ここ河口湖に設置されていた。江戸以前、太平洋岸に出て京にむかうには、ここを通る鎌倉街道がメインルートの1つであった。そうやって人々は、この地域を通り過ぎていく。また、もともとの寒冷さに加えて土壌の悪さ、さらには水害などが相俟って、この河口湖エリアは閉じた農業共同体をつくるには向いていない面もあるにはあった。だから、この土地の人々には、行商するために他へ出て行き、モノを他に買い求め、あわせて他の地域を見聞し、また戻って来てはを繰り返す、そうした必要もあったのである（これは、とくに大石地区を念頭において言っている）。こうして交通空間が生きられているならば、そのなかから、かちかち山のような物語の総合が出てきてもおかしくはない。交通の要衝であったことは断片的挿話の総合を促

す積極的契機とはいえないが、必要条件だったとは考えられるだろう⁽⁴⁾。

もちろん、この考えには飛躍があり、交通を過大評価する面もある。断定しようとは思わない。ただ、仔細にみれば、他の地域から流入してきた数々の文物を——たとえそれが小さなものであっても——、この地域では見ることができる。交通がもたらした財産の豪華さは強調されてよいのではないだろうか⁽⁵⁾。

ここで少し話が飛ぶが、2つのことを言っておこう。1つは江戸以降、河口湖エリアが交通の要衝としての地位を低下させたことである。江戸という都市が勃興し、江戸を中心とする各主要都市を結ぶ交通ネットワークが成立すると、河口湖をとおる街道は裏道化してしまう。この点で、河口湖エリアがもっていたある種の有利さは、必ずしも自明ではなくなるという経過をたどるのである。

もう1つは観光について。観光客というのはまさに、交通ネットワークを利用してやってくる存在である。彼らは観光地に定住こそしないものの、何らかのコミュニケーションをつうじてその土地に有形無形の足跡、またその痕跡を残して去っていく存在である。この痕跡こそが、かちかち山に関連して述べた、交通がもたらす財産である。しかし、今日の観光産業のように地域にどれだけのお金を落とすかまで測定しようとするならば、この財産は、決して推し量れる性質のものではない。

内藤嘉昭「富士北麓観光開発史研究」によれば、江戸時代、河口湖エリアの河口村は、下吉田とのあいだで江戸からやってくる富士講（富士山信仰）の檀家をどちらがどれだけ囲い込めるかで争っている。また、明治以後には、河口湖エリア全体が、山中湖とのあいだでレジャーにくる一般観光客の獲得競争を繰り広げている（内藤、2002）。この2つの争い、すなわち「河口村 vs 下吉田」と「河口湖 vs 山中湖」の争いにおいて、内藤はそれほど強調していないけれども、結局のところ、江戸＝東京を中心とする交通ネットワークのなかで有利な条件にたつほうが、訪問客の数においては優ったように見受けられる。前者では下吉田が勝ち、後者では河口湖が勝った。しかし、考えるべき点はずぎのことだろう。それは、富士講の檀家獲得に優った下吉田は火祭りのような特殊な伝統行事を今日まで生きながらえさせており、明治以後の観光客獲得に敗れた山中湖は独特なブランド性と実収入の高さで成功を収めている、という点だ。これに対して河口湖エリアは、さきほど述べた「財産」という点で、やや見劣りがするのではなかろうか。つまり、観光客獲得競争とはべつの次元に、観光都市づくりをめぐる競争が存在しており、訪問客との交流＝交通をつうじてつくりあげられる文化の豊かさなるものが存在するという点だ。

この点について、内藤は、河口湖が下吉田や山中湖にくらべて相対的に裕福だったからこそ、あえて活路を求める「必死さ」を生み出さなかったのではないかと述べている。そうした分析の当否はべつにしても、交通が生み出す豊かさの価値、そしてそれは交通が自動的に生み出すのではなく「必死」な人為によってつくりだされる豊かさの価値は——おそらくすべての自治体がそうであるのだが——再考される必要があるだろう。かちかち山についての柳田の考察から、そうしたことが学ばれていいと思われる。

4. 偉業としての新倉掘抜事業

河口湖の駅から5分ほど歩いたところ、富士レークホテルの筋向かいに富士博物館という小さな民俗資料館がある⁽⁶⁾。その入り口には河童地蔵という珍しい地蔵尊が立っており、この地域の水難の多さが偲ばれる。

前節ではこの地域が他へ開かれた交通空間だったことを述べたが、河口湖エリアが地域としてまとまりをもつ（つまり、閉じる）のは、何よりも湖を中心とする共通の自然環境をもち、水難のような人々が蒙る苦難を共同のものとしてきたからである。ここで忘れてはならないのは、甲府の信玄堤のように、自然に対して人為的介入を行なうことで社会秩序の統制を図るといった営みが日本で一般的になるのは、かなり新しい時代に入ってからである、ということだ。信玄堤はその点で画期的だったのであり、利根川・淀川・北上川など、各地方で大規模な河川事業が組織的に実施されたのは江戸時代の出来事だった（小出、1975）。それまで人々は、あたかも周期的に訪れる自然の脅威をただただ受動的に受け取るだけの、そして自然の脅威が去るのを静かに待つといった、そうした生活のなかにあった。ここ河口湖エリアの人々も同じである。ごく稀に、100年単位の周期で地を震わす富士に対しては、日常を超えた宗教心をもって接しただろう。湖に対しては、そこを生活の場として福利を受け取りながらも、同時に危険や苦難を甘受して、光と影の双方を生活に溶け込ませていたに違いない。こうして、みずからの自然的条件に対して、富士講や河童地蔵に伺われるような独特の行動様式をもったコミュニティが成立し、資料が不足しているため確かなことは言えないものの、きわめて長いあいだ、古く小さなコミュニティは持続したであろうことが想像されるのである。

だがやがて、自然に抗して、しかし自然を破壊するのではなく、自然と人々との新たな関わり合いを作り出そうとする動きが、河口湖でも現れてくる。その画期を記すのが、これから触れる新倉掘抜事業である。以下では、北条浩「河口湖水利権史」、星野芳三「新倉掘抜の史的概観」などを参考に概略を述べてみよう（北条、1971、星野、1992）。

まず、太閤検地以降、あらかじめ然々の土地にはどれだけの収穫が見込めるかを測定し、年貢の徴収量をまえもって決めるといふ、新たな統治様式が現れたことに触れねばならない。それ以前、収穫高は気象条件などに左右され、一定しないことが前提になっていた。これは一見あたりまえのようにも思えるが、場当たりの側面もあった。これに対して太閤検地は、自然の影響力をあえて一定と見なし、あるいは度外視することで、年貢量を予測可能なものへと変えたのだ。このとき徴税＝再分配をめぐる政治に初めて計算可能性が導入されたのである。しかし、河口湖のような土地は、検地に馴染まない部分があった。というのも、周期的に増水や減水を繰り返す湖水エリアでは、耕地面積がそもそも一定しないからである。あらかじめ土地を検分しても、その土地が浸水してしまえば、計画どおりに年貢を取めることはできない。そこで、江戸期をつうじて何度も年貢の減免願いが出されることになった。農民としては、取めるべき年貢をなるべく小さく抑えたいために、減免願いでは過大に水害を報告した面もあったようだ。しかし少なくとも、政治の合理化の

進展に対して合理化を許さない河口湖の自然的条件が、ここでクローズアップされることになった。

また、天上山を挟んで隣接する新倉村（現富士吉田市）は、かつての富士噴火時に溶岩道だったこともあり、水資源に恵まれず、河口湖エリアとは正反対に逆に水不足に悩まされる土地柄だった。一方の水害と他方の水不足、とうぜん両エリアを通水させるアイデアが出てくるのは自然の成り行きだったろう。

そこに、江戸時代初期の河川事業ブームが重なってくる。将軍綱吉の時代、谷村藩秋元氏という領主の主導のもと、2つの地域に掘抜を建設しようとする事業が開始された。しかし最終的には、11年間の努力にもかかわらず、河口湖と新倉の両地域から掘り進んだ坑道はついに会おうことなく（異説もあるようだが）、事業は頓挫してしまう。これを契機に谷村藩は天領化され、以降150年、事態は何も変わらないまま過ぎ去ってしまい、掘抜事業は忘れられたかにみえた。

ところが、江戸時代をつうじての市民階級の成長は著しかった。19世紀半ば、土砂崩れによって掘抜事業跡が再発見されると一気に事業への熱気が再燃し、今度は領主でなく（そもそも天領だから領主はいない）、領民が主導権をとって、領民・加賀屋佐藤次を中心にして事業が再開されたのである。1847年のことだった。この工事は成功したが、通水量は少なかった。16年後、ふたたび通水事業が着工され、明治に入ってから断続的に工事が続行されながら、やがて通水の企ては完遂されるに到る。この時期の、みずからの村のために資金と労力を惜しまなかった人々の営みには、今日からみても目を見張るものがある。

ここで最近の知見を紹介しておこう。中村章彦によれば、伊豆半島伊東市の大室山南麓に「池」という集落があり、そこには文字どおり池があって、河口湖と同じく水害に悩まされていたという。そして池の干拓事業をつうじて水害を克服した点も河口湖と同様だった。その池の干拓に関わる石碑のつくられた年代とそこに刻まれた名前を追っていくと、どうやら新倉掘抜にも関連しており、結論的には、新倉の事業の成功を伝え聞いた池集落の人々が、河口湖から技術協力者を招いたと推定できるという（中村、2002）。つまり、新倉掘抜事業は、事業の当時においてすでに高く評価され、また、河口湖コミュニティは近隣諸地域に成功の果実を惜しみなく分け与えていたのである。コミュニティは決して閉じた存在ではなく、他の地域へと開かれてもいたのだ。

そして明治以降——わずか数十年のあいだではあるが——、現在のような上下水道や防水設備が完備されるまでのあいだ、新たに発足した掘抜の管理組合は、この地域の住民自治全体にとって中心的な役割を担っていた。ここで「全体」というのは、掘抜が水量の調節をつうじて水害を防ぐだけでなく、湖水が住民の生活全般に関わるものであるからだ。水は、人々に害を及ぼすだけでなく、生活用水としても使われるし、そこは小型舟が交通する場所でもあり、何より当時はワカサギの漁獲高が日本でも有数だったということがある。湖面が凍れば遊び場にもなり、そこは湖水をめぐる伝説の源泉でもあった。水は、害とともに幸をもたらすのであり、掘抜の管理を共同で行なうということは、みずからの生活にかかわる全般をみずからの手で律することにも通じていた。大正期、湖水を利用した水力

発電をめざした電力会社が湖水の水利権を主張し、住民たちとのあいだに衝突が起きるといふ一幕があった。けれども、住民にこそ水利権があると認められたのは、認めるべき切実なものがそこにあったからだと言うべきだろう。

しかし、舟が生活のなかから退場し、その他の社会的基盤整備が進むにつれ、徐々に管理組合の歴史的な役割は終わりに向かっていく。昭和50年代にワカサギが壊滅する⁽⁷⁾に到って、湖水と住民生活のあいだの接点はほとんど切れ、湖は水の美しさをただ遠くから鑑賞するだけの、まるで絵ハガキのような存在になったかのようだ。とはいえ、新倉掘抜事業を住民の手で完成させ、それがべつの地域でも活用されるほどの普遍性を獲得し、自治において重要な役割を担ったという経験は、今日なお誇るべき輝きを放っている。

5. 河口湖コミュニティ論にむけて

以上この小論では、やや次元の違うテーマを検討してきたが、1-2節では自然に対する人々の営みの次元が存在し、その営みこそが自然の美を美たらしめるだろうこと、3節ではこのエリアの人々が住まう場所が他へ開かれていること、開かれた交通空間で人々の営みがなされてきたこと、そして4節では、抜き差しならぬ自然的条件のもとで、誇るべき人々の営みがあったことなどを述べてきた。その一部は、社会的条件の変化によってすでに過去のものになっているが、とはいえ、これらはすべて現在にとっての「地層」であり、現在の視点から再発見されるのを待っている状態ともいえるように思われる⁽⁸⁾。

最後に、過去ではなく未来へむけてのことに、少しだけ触れておこう。考えてみたいのは、現在、観光政策のスローガンとされている「5感文化」についてである。これは、視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚といった5感をすべて使って、この地域を堪能してもらおうという観光理念である。具体的には、美術館・ホール・レストラン・公園などを整備するかたちで進められるという。

これに対して「看板のすげ替えに過ぎない」といった批判がありうるだろうが、位置づけをはっきりさせることは大切なので、必ずしもそこは問題ではないと思われる。また、既存の観光設備に加えて新たな設備が建設される場合には、地元の土木建築業者の利益を優先するような事態が起りかねないとも想像されるけれども、まだ起こっていない問題について今から何かを言う必要はないだろう。

むしろ筆者が危惧するのは、ホールだけが作られて中身が何もないという「ハコモノ行政」に陥る可能性である。いや、もっと言えば、単なるハコモノでなくするために何をするか、といったときに、オーケストラや展示物など、そうした文化ソフトをすべて外注するという事態である。もちろん、質の高い文化ソフトを招致するのは悪いことではない。ただ、観光客という外来の者が同じ外来者の文化的パフォーマンスを堪能してそのまま立ち去ってしまうとしたら、現地の人間はどこに出てくるのだろうか。現地の人間が施設を利用する機会に恵まれるならまだいいのだが、もしそれさえないとしたら、観光という行為を中心に織り成されるコミュニケーションの網の目から、現地の世界を生きる人々の営み

はシャットアウトされることになる。それでは交流＝交通の痕跡が何も地元には残らない。

繰り返しになるが、文人たちは、ただそこにある自然を愛でたのではなかった。彼らは自然とともにある、ときには自然と拮抗するような人間的世界をつくりだそうとしたのである。じっさい人々は、自然を媒介にして人間的世界をつくりあげてもきた。それが過去の富士山画に描き込まれたことである。そして、こうした対自然的な関係性のうえに、交通の要衝たる河口湖コミュニティは、他のエリアとの相互作用をつうじて、いわば人間と人間とのヨコの関係性をつうじて、独自の文化をつくりあげ、掘抜事業のような偉業をすらし遂げたのだった。

コミュニケーションの束からコミュニティが成り立つとすれば、観光で生きるコミュニティは、観光でやってくる他者から有形無形のものを得、それでみずからを豊かにする方途を見つけるべきように思われる。他者がコミュニティを再発見することはしばしばあり、それをわがものとするのは他者との交流をおいてない。きわめて抽象的な言い方だが、自然をただ見せるのではなく、それとともにある現地の人々の営みをつうじて、そこから新たなコミュニケーションと文化創造の可能性を開拓していくこと。ハコモノ行政は、観光客獲得競争には一定の役割を果たすだろうけれども、それが人的・文化的な交流を促し、かつて「かちかち山」を生み出したような、そうした豊かな実りをもたらすようには思われない。筆者の感じる勝手な危惧は、こうした点にかかわっている。

今日、水害などの自然的制約から自由になって「自然からの解放」がすすんでいるが、それが自然との断絶を意味し、ただ自然を遠くから鑑賞するだけの距離を生んでいるとしたら、寂しいことだろう。もちろん伝統的世界の復権など思いもよらないが、自然との新たな関係性の構築、すなわち「自然への解放」こそが現代の課題とはいえないだろうか⁽⁹⁾。最後に余計なことを書いたようでもあるが、以上をつぎなる課題として、このノートを閉じることにはしたい。

註 釈

- (1) ここで念頭においてるのは「陰翳礼讃」である。谷崎は晩年に伝統回帰したと言われるが、この作品は西欧化の流れに抗して書かれている。「凝固した行為規則としての伝統」にコミットしたわけではない(谷崎,1933)。集合的なものから距離をとる彼の姿勢は、耽美的、悪魔的といわれた初期作品から晩期にいたるまで一貫し、この点では、すぐあとに触れる伊藤の姿勢とは一線を画している。
- (2) 具体的には、大小の鳥居、要所々々に建てられた神社群、天地界館、奥宮、登山道の途中にある茶屋、食堂、休泊施設、これより先は徒歩で行かねばならない馬返し、頂上の測候所、達磨岩、石堂、砂利道、などである。いずれにせよ、富士の「内部」がハガキのモチーフとなっている。
- (3) 柳田國男については、たとえば橋川文三の著作などを参照せよ(橋川,1977)。なお、猿橋・犬目・鳥沢・鬼の杖などの地名がある大月市には「桃太郎伝説」が残っているが、窪田薫の説によれば、鉱山や修験者の存在と桃太郎伝説の発生のあいだには一定の相関関係が認められるという(窪田,1998)。全国的なネットワークをもつ修験者は、閉じたコミュニティにとってはまさに「まれびと」だった。ここでもコミュニティが外部との関係をつうじて物語を紡ぎ出す様子が伺えるだろう。
- (4) 洋服が導入されたため昭和になって絶滅したものの、江戸以降、河口湖エリアでは絹織物の生産とその行商が盛んであった(外川,1977)。一度は忘れられたが、今日ようやく伝統工芸として再度注目を集めている。筆者の想像では、行商で男が外へ出て行き、女が織物という独自の仕事を得る一方で「男抜きで」家を守る経験をつうじて、女性の地位に何らかの影響があるようにも思うのだが(「大石女」の呼称を想起せよ)、これはまだ想像の域を出ていない。今後の課題である。
- (5) この「流入する文物」で念頭にあるのは、たとえば渡来人との関係が想像される徐福伝説とその遺跡、白山神社などの全国区の神社、日蓮や親鸞といった鎌倉仏教の始祖たちの伝道跡、また短期間ではあるが江戸初期の谷村藩領主のそうそうたる顔ぶれとその業績、妙法寺に秘藏された御輿に施された彫刻の見事さなどである。本稿でとりあげた文人たちや富士山信仰、かちかち山などはその一端にすぎない。あとで触れる掘抜事業の技術もまた他エリアとの交通によって得られたものである。
- (6) 富士博物館の紹介によれば「その収蔵品の数々は専門家さえ唖ってしまうほどのクオリティー」があるとのこと(<http://www.fujigoko.tv/viwp/fujihakubutu/>)。しかし、富士吉田市歴史民俗博物館と異なって、それが公的に組織された施設でない点が、この地域の、みずからの歴史に対する視線の何ごとかを物語っているようにも思える。
- (7) 農水省発行「漁業養殖業生産統計年報」の昭和56年度版まで、河口湖は主要湖沼に数えられていた(農林水産省統計情報部,1984)。一々数字を挙げないが、ワカサギの漁獲高は有数であり、近隣のホテルでも獲れたワカサギが必ず振舞われていたという。電話で確認したところではブラックバスとは関係ないようだが、生態系の変化が湖水と人々の関係に影響を及ぼしているのはたしかだろう。
- (8) 寺山伸悟は奈良県吉野郡を調査対象とした地域研究のなかで、廃線跡を利用したムラおこしに触れている(寺山,2003)。線路跡をつかったアトラクション中心の最初のイベントは大いに成功を取めたが、住民たちにとっては何か足りなかった。そこで2度目の開催時にはアトラクションをやめて、歴史の語りを中心においたところ、これが別種の成功を取めたという。このアトラクションと富士の自然美とは並置できるのではないか。
- (9) スカイライン開通後、観光化と同時に富士の自然破壊がすすむ状況を見て、新田次郎は小説中の人物に、それが「自殺的観光政策」だと語らせている(新田,1976)。その言葉をどう受け止めるかはべつにしても、今日、自然に対する人間の側の、何らかの営みが要求されているのは明らかだろう。そして富士は1つのコミュニティの占有物ではないのだから、コミュニティ同士の連携=交通こそが必要なように思われる。また、今回は検討できなかったが、観光と福祉は果たして根本的に別物だろうか。福祉活動・政策もまた文化に根ざすものだとすれば、必ずしもそうは思えないのだが、それは今後の課題となる。

文 献

- 太宰 治 1939 「富嶽百景」 1967『走れメロス』新潮文庫 pp45 - 68
- 富士河口湖町立役場 2005 『思い出の河口湖町』(DVD)
- フジヤマ・ミュージアム 2003 『フジヤマ・ミュージアム作品集Ⅰ』
- 橋川文三 1977 『柳田國男－その人間と思想』講談社
- 北条 浩 1971 『河口湖水利権史』慶應書房
- 星野芳三 1992 「新倉掘抜の史的概観」 『論集群内研究』都留市郷土研究会 pp103 - 126
- 2002 「新倉掘抜の考察」 『甲斐路』100号 pp36 - 49
- 飯田文弥 1982 「郡内領における嫁盗みの禁令」 『甲斐路』44号 pp28 - 29
- 伊藤左千夫 1907 「河口湖」 1968『野菊の墓 他六編』新学社文庫 pp76 - 86
- 小出 博 1975 『利根川と淀川－東日本・西日本の歴史的展開』中公新書
- 窪田 薫 1998 「大月市の桃太郎伝説考」 『郡内研究』8号 pp51 - 65
- 前田俊一郎 2001 「甲州の両墓制(下)」 『甲斐路』98号 pp1 - 15
- 内藤嘉昭 2002 『富士北麓観光開発史研究』学文社
- 中村章彦 1978 「郡内領船津村における天保飢饉」 『甲斐路』33号 pp33 - 37
- 2001 「将軍家御祈願所の御師・三浦家」 『甲斐路』98号 pp16 - 27
- 2002 「新倉掘抜の職人により掘られた池開発隧道－掘抜技術の伝播を検証する」 『甲斐路』100号 pp50 - 60
- 新田次郎 1976 『『妙法寺記』原本の行方』 1977『鷲ヶ峰物語』講談社 pp175 - 223
- 農林水産省統計情報部 1984 『昭和57年漁業養殖業生産統計年報』
- 奥脇和男 1999 「近代富士登山の変貌」 富士吉田市歴史民俗博物館『絵葉書にみる富士登山』 pp107 - 112
- 太田・児玉・鈴木・坪井編 1982 『図説 日本の町並み5 中部編』第一法規
- 菅沼英雄 1966 『河口湖町史』河口湖町役場
- 1977 「富士五湖周辺の水－水の所在と水利」 『甲斐路』31号 pp91 - 103
- 竹谷鞆負 1998 『富士の精神史』青山社
- 谷崎潤一郎 1933 「陰翳礼讃」 1975『陰翳礼讃』中公文庫 pp7 - 52
- 寺山伸悟 2003 『地域表象過程と人間－地域社会の現在と新しい視座』行路社
- 外川理一 1977 「河口湖畔行商地帯の史的考察」 『甲斐路』31号 pp36 - 45
- 柳田國男 1935 「かちかち山」 1990『柳田國男全集8』『昔話と文学』ちくま文庫 pp323 - 341
- 不明 1993 『目で見る郡内の100年』郷土出版社